

琉球大学学術リポジトリ

障害児をもつ親の意識の変容過程

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神園, 幸郎, Kamizono, Sachiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/894

障害児をもつ親の意識の変容過程*

神 園 幸 郎

Changing Process of Consciousness in Parents of the Handicapped Children

Sachiro KAMIZONO
(Received August 20, 1983)

問 題

親であることは、並大抵なことではない。ましてや、障害児をもつ親の場合、その状況は一層複雑で苦難に満ちたものである。また、数々の障壁が待ちうけており、時には危機的状況に陥る危険性さえもはらんでいる。初めて経験するであろう障害児の育児やしつけに対するとまどいや、障害児に対する社会の無理解による孤立感といった精神的負担に加えて、障害の治療等にかかる経済的負担といった種々の要因が絡み合せて、想像以上の圧力となって親ののしかかって来る。これらの様々なストレスは、親の意識や子どもに対する態度を変える大きな力となって作用するであろうことは容易に理解できる。さらに、子どもを取り巻く様々な状況の変化に伴って、親の意識や態度も、数々の変遷を辿るであろう。我が子が障害児ではないかというかすかな不安が現実となった時、ほとんどの親は、激しいショックを受け、精神的なパニック状態に陥る。この時を契機として、親の心理は健常児の親とは較ぶべきもない程の激しい動揺を起こす。宮本(1960)は、精神薄弱児をもつ親の心理過程を次のように分析している。1) 精神薄弱児の生まれた原因を自己流に考えて思い悩む。2) 精神薄弱児をもつ苦悩や困りの白眼視にたえられず、その現実から逃れようとす

る退行的感情が生じる。3) 子どもが精神薄弱であることを認めたくないといった防衛機制が働く。4) 防衛的な気持が攻撃的な態度となって表われる。5) 同じような子どもを持つ人たちと悩みを語りあつたりすることにより、自らの心的静化(カタルシス)を行う。6) 他の子に期待したり、信仰や仕事、社会的活動に熱中することによってフラストレーションを代償する。

このように、親の心理は、様々な状態を揺れ動く。また、子どもの成長、発達に伴って、親子関係、就学問題、地域社会との関係といった、子どもを取り巻く事態の力動的変化に伴って、子どもに対する親の意識や態度も幾多の変貌を遂げていく。Rosem(1955)は、精神薄弱児をもつ母親の子どもに対する理解度の発展段階を1)問題に気づく段階、2)問題を認める段階、3)原因を探し求める段階、4)解決方法を探し求める段階、5)問題を受け入れる段階の5段階に分けている。また、鎚(1962)は、親の手紙や手記を分析して、親の進んでいく過程を次に示す8段階でとらえている。1)子どもが精神薄弱児であることを認知するまでに迂余曲折があり、2)この間の親自身の苦悩、不安、絶望があり、3)次に何とか現状を打開しようとする数々の努力があり、4)その後、ようやくこのような子をもつのがひとりではなく同胞がいることを発見し、5)これに伴って、精神薄弱児としての子どもに対する本格的な努力を行うようになり、6)これまで苦悩と絶望の種子であった子どもへ、努力することのできる道

*本研究は昭和57年度文部省科学研究費補助金「特定研究」、復帰10年の沖縄の教育と社会の第3班「特殊教育総合調査」の一部である。

を知ることによって、希望を見出し、7)このような努力のうちに、親自身の人格的成長、もっとこれまでより広い視野に立ってものを見ることができるようになったのを子どもに感謝し、8)これらの喜びや感謝を、いまだ悩み苦しんでいるひとびとに知らせるために努力していく。

さらに、水田(1978)は、ダウン症児をもつ親の意識や態度に関する調査にもとずいて、次のような報告を行っている。それによると、ダウン症児をもつ親の心は、ショック、拒否、嫉妬、罪意識、過保護と排斥の段階を経て、適応に至ると述べている。

以上の知見は、主に精神薄弱児をもつ親の意識や態度についてのものであるが、どのような障害を背負った子どもの親でも、程度の差こそあれ、一度は経験するものであろうと推察される。そこで、本研究は、障害の種別にかかわらず、障害児をもつ親に共通する意識や態度にどのような違いがみられるかも併せて検討する。それらの知見に基づいて、障害児をもつ親や家庭に対する援助の方策を探りたい。

方 法

1. 調査の方法

本調査は、水田(1978)の“ダウン症児を持つ親の意識調査”を参考にして作成された高良ら(1983)の質問紙を、本調査用に一部変更したものをを用いた(資料参照)。

2. 調査内容

障害児をもつ親の意識をできるだけ多角的に把握するために、以下の3つの観点に沿って調査項目が作成された。

- 1) 子どもが障害児であると判明した時点における親の意識や感情に関する項目。
- 2) その後の親の意識変容に関する項目。
- 3) 子どもに対する親の態度に関する項目。

1)の範疇に含まれる項目として、以下の3つの項目を設定した。

- (1)子どもが障害児と判明した時の親の感情について
- (2)子どもの診断結果に対する受容度について

(3)障害児出生についての親の責任について

2)の範疇を構成する項は、水田(1978)の調査項目を大幅に採用し、以下の5つから構成された。

- (1)障害児の親としての“はずかしさ”について
- (2)健常児の親に対する嫉妬心の有無
- (3)“あきらめ”の感情の経験について
- (4)子どもに対する排斥感情の経験の有無
- (5)現在の生活への心理的適応度について

3)の範疇は、以下の3つの項目より構成された。

- (1)子どもの教育に対する親の関心度
- (2)子どものしつけについての親の態度
- (3)子どもの養育について

以上の項目に加えて、親の対外的接触についての関心を知るために、障害児親の会への入会の有無に関する項目と、子どもの教育についての関心度や子どもの将来についての親の希望や考えを知るための項目を設けた。

なお、各項目に対する回答方法は選択法によるものとし、それぞれの回答の背景を知る必要がある項目については、適宜、その理由を自由記述できるように工夫した。

3. 調査手続き

調査票は、それぞれの学校の教師を通して配布してもらい、記入を依頼した。回収も同様な手続きをとった。

4. 調査対象および回収率

調査は、沖縄県の精神薄弱児養護学校、肢体不自由児養護学校、盲学校、そしてろう学校の各一校ずつに在籍する児童の親(父もしくは母)617名を対象とした。その内訳ならびに回収率を表1に示した。

表1 調査対象および回収率の内訳

	精 薄	肢 体	盲	ろ う
対 象	177	155	119	166
回収数	72	65	36	52
回収率	41.8 %	41.9 %	30.2 %	31.3 %

結果と考察

1. 各調査項目ごとの回答率による検討

1) 障害児と判明した時の親の意識

表2は、子どもが障害児であると判明した時に、“ショックを受けましたか”という項目についての結果を、各障害別にパーセンティで示したものである。この項目については、障害の種類にかかわらず、90%内外の親が、ショックを受けたと答えている。また、“障害児であると知らされたのは誰からですか”という項目については、医師という回答が全障害にわたって割合が高かった(表3)。

親は、日々の子どもの接触から、我が子が障害児ではないかとの疑いや不安に満ちて診断の機関を訪れる。したがって、診断の結果を何の配慮もせずいきなり知らせたり、親の気持ちを無視した一方的な忠告をしたりする鈍感な専門家は、往々にしてかなりの苦痛と心の傷を親に負わせることになる。程度の違いはあっても、障害児であると知らされると、どんな親でもショックを受けるのは当然であろう。しかしながら、そのショックが、診断結果の伝え方や専門家の態度によって増幅されることが往々にしてあるのも現実である。診断のために親がまずもって訪れるのは病院である。親の医師への信頼は絶大なものがある故に、医師の一言一句が障害児の親の意識や子どもに対する態度に深刻な影響を与える。したがって、障害の適切な診断はもとより、診断結果を親に伝える際の注意深い、慎重な対処が医師やその他の専門家に望まれる。

表2 “障害児であるとはっきり言われた時大きなショックを受けましたか”

	精神	肢体	盲	ろう
受けた	91.3	95.3	90.4	85.9%
受けなかった	6.1	2.7	4.9	9.3%

表3 “はじめて障害児だと知らされたのはだれからですか”

	精神	肢体	盲	ろう
医師	79.7	47.8	65.7	89.0%
夫(妻)	5.4	0	7.8	5.4%
祖父母	0	0	10.8	0%
その他	15.0	52.2	15.7	5.6%

図1は、各障害別にショックを受けた時期を、子どもの年齢ごとの度数分布で模式的に示したものである。図からも明らかなように、ショックを受けた時期は、障害の種類によって違いはあるものの、概して、1歳までと3歳前後に集中していることがわかる。障害名および障害の程度についての情報は得ていないため、推測に過ぎないが、1歳までにショックを受ける場合の子どもの障害は、病理的機転の強いものや障害を比較的早期に発見できるものが多いと考えられる。たとえば、精神薄弱では、ダウン症や遺伝的、病理的原因にもとづくもの、肢体不自由では、脳性マヒ等の出産時障害や奇型等の可視性の高いもの、視覚障害では、未熟児による盲膜症、聴覚障害では沖縄に特有な風疹難聴児等があげられる。これに対して、3歳前後に初めて障害児であると知らされショックを受けた親の子どもは、生理的、後天的原因によるものが多く、比較的軽度のものと考えられる。また、3歳時には、各種の検診等も行われることや、子どもの活動性が高まり、ことばの発達が急速になることなどから、個人差が顕著になり、障害の発見が容易になることも関係しているであろう。また、精神薄弱と聴覚障害は、3歳前後にpeakを持つものに対して、視覚障害と肢体不自由は1歳までの割合が高く、障害の種類によって、類似性があることがわかる。一般に、視覚障害や肢体不自由のように可視性の高い末梢障害の場合は比較的早期に障害が発見されやすいが、末梢障害であっても比較的気づきにくい聴覚障害や中枢性障害の精神薄弱は、子どもの活動性が向上し、ことばの発達が顕著になる3歳前後になるまで、その障害の発見が遅延する傾向があることと関係しているのかもしれない。

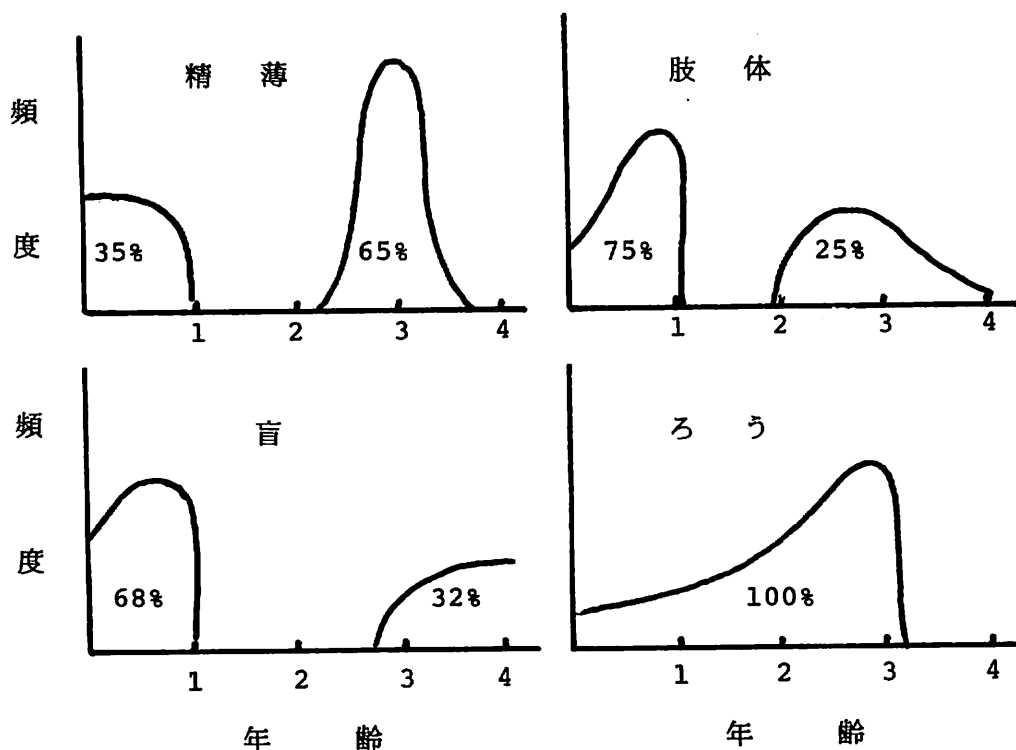


図1 ショックを受けた年齢

障害児と診断され、ショックを受ける時期に関して、障害の種類による違いがあることが明らかになった。親の心の動きは、この時を契機にして様々な変容をしていくが、障害児と診断され、ショックを受ける時期が早いか遅いかは、その後の親の心理に大きく影響すると思われる。そこで、障害発見の時期と親の意識との関連性について分析を行ったが、明確な関連性は認められなかった。ただ、子どもの養育についての項目で、ショックを受けた時期が1歳までとその後とで、わずかな意識の違いがみられた(表4)。1歳までにショックを受けた親は、身体虚弱やADL(日常生活動作)面での不安を訴えているのに対して、後者は言葉の面での不安を示している。これは、ショックを受ける時期の違いが、障害の発現形態や軽・重の要因と関係し、それらの要因の差異が、特に養育面における不安対象の違いとなって現われているものと解釈できる。

Rosen (1955)によれば、親達は専門家によって一旦子どもの障害について基本的な認識がなされると、次にその障害をもたらした原因を追求することにやっきになると述べている。また、Korkes (1955)は、この原因探求の底には2種類の動機が存在するとしている。その1つは、障害の原因を発見するにあたって、彼らが将来産むかも知れない子どもに、その障害が出ないようにする方法、あるいは治療法を見つけることができるかもしれないという期待である。もう1つの動機は、重い責任と罪の重荷から救われたいという性急な欲求から出ているとしている。本調査で対象にした親達のうち、半数以上の親が障害児を出産したことによって自責の念にかられていることが明らかになった(表5)。これらの親達は、その重責から逃れるために、自らが受け入れることのできる診断を求めて、無益な診断機関まわりをくり返したであろうことは想像に難くない。子どもが、なぜそうなっ

表4 “どういう面で不安でしたか”

	精 薄		肢 体		盲		ろ う	
	0～1歳	1～4歳	0～1歳	1～4歳	0～1歳	1～4歳	0～1歳	1～4歳
からだが弱く、じょうぶに育つか不安だった	82	26	52	33	36	100	42	25%
お乳のすいつきが悪かった	35	13	21	33	0	0	8	6%
立ったりすわったりできなかった	52	22	66	100	9	0	0	6%
排便、排尿の自立ができなかった	76	35	45	33	36	0	8	12%
言葉が話せなかった	82	100	48	33	36	0	67	94%
文字を書いたり読んだりできるか不安だった	53	52	31	33	45	0	33	34%

たかを見い出す労力は、徒労に終ることが多い。しかしながら、この事を親にいくら話したところで、有効な場合は少ない。親自身が早くそのことに気付き、子どもにも目が向くような手だてを考へることが専門家に課された大きな課題である。

表5 “障害児を出生したことに対して”

	精 薄	肢 体	盲	ろ う
自分に責任があると思った	54.3	48.6	54.7	59.3 %
他に責任があると思った	22.2	22.2	19.9	10.9 %

2) 親の意識の変容について

親は、我が子の障害を認識すると、その時点から障害児の親として様々な感情や意識の変化を経験する。表6は、“障害児をもったことに対して、はずかしいと思いましたが”との質問についての結果を示したものである。この項目に対して、知恵遅れの子をもつ親の65%が“はずかしい”と答え、他の障害をもつ親と対照的な回答をしている。さらに、“はずかしい”と思った理由に関する問いでは、聴覚障害児の親を除い

た他の障害で、知恵の遅れを第1の理由としている(表7)。子どもの知恵の遅れが、親の“はずかしさ”と密接に関係していることがわかる。したがって、他の障害に較べて、知恵の遅れを主徴とする精神薄弱児の親において、“はずかしい”と答える割合が多いのは当然であろう。また、“はずかしいとは思わなかった”と答えた親の理由として、“しだいによくなっていくと思った”という回答の割合が高かった。“はずかしいと思わない”ことは、親にとって好ましいことは言うまでもない。しかしながら、“はずかしくない”ことの理由として、“しだいによくなっていくと思った”ということが問題である。この理由は、好意的に捉えれば、子どもに対する期待が高く、親の子どもに対する態度として好ましいものと考えられることができるが、反面、

表6 “障害児を持ったことに対してはずかしいと思いましたが”

	精 薄	肢 体	盲	ろ う
思った	65.4	44.4	33.3	43.7 %
思わなかった	33.3	52.7	61.9	54.6 %

子どもの障害を感情的に認めたくないという気持ちや、周囲の人の子どもや自分に対する態度への防衛的な気持ちから出たものと捉えることもできる。もし、後者の気持ちにその真意があるとすれば、“はずかしい”と答えた親以上に、子

もの障害に対する基本的な認識が確立していないことになる。そして、そのことは、とりもなおさず、子どもの発達の状態に対して、親の関心が向いていないことになり、子どもの発達を阻害する大きな要因になる可能性がある。

表7 “はずかしいと思ったのはどうしてですか”

	精薄	肢体	盲	ろう
同年の子と比べて知恵が劣っているから	69.8	46.8	42.8	28.5%
顔かたちが他の子とかわっているから	13.2	6.2	21.4	0%
動作かにかぶいから	18.8	34.3	14.2	7.1%
人にいろいろと聞かれるから	30.1	34.3	28.5	50.0%

表8は、“健全な子をもつ親にうらやましさを感じましたか”という項目についての結果である。全障害にわたって、半数以上の親がうらやましいと答えている。“うらやましさ”の感情は、先に述べた“はずかしさ”の感情と相拮抗した感情と捉えることができる。したがって、“はずかしい”と答えた親は、必然的に“うらやましい”という感情を経験することになるであろう。そうであれば、“はずかしい”と答えた親の割合は、“うらやましい”と答えた親の割合とほぼ等しくならなければならない。しかしながら、全障害ともに、“うらやましい”と答えた親の割合が“はずかしい”と答えた親にまさっていた。これは、先に述べたように“はずかしくない”と答えた親の中に、一種の防衛的な気持ちにもとづいた回答があったことを裏付けるものとして興味深い結果である。

表8 “健全な子を持つ親にうらやましさを感じましたか”

	精薄	肢体	盲	ろう
はい	70.3	68.0	52.3	65.6%
いいえ	19.7	19.4	30.9	17.1%

以上のように、障害児をもつために羞恥心や、嫉妬心といった好ましくない感情が生じてくるものの、“あきらめ”といった否定的な気持ちや、“もし、この子がいなければ”といった排斥的な感情のような子どもに対する極端で最悪の感情を持つ親は少なく(表9、表10)、むしろ“この子がいることによって、生活のはりを感じる”と答えている所に、親子関係の愛情の深さが伺われる(表11)。このように、“生活のはり”さえも感じることでできるようになった親は、幾多の苦難を乗り越えながら、子どもの障害を受け入れ、現在の生活に適応できており、親の目が子どもの発達に向いているものと推察される。しかしながら、“あきらめ”や“もし、いなければ”といった気持ちを経験した親も、精神薄弱児の親を中心に多く、“生活のはり”を感じたことがない親が2割前後いることも見逃してはならない。これらの親は、子どもがある程度成長した現在においても、苦悩のただ中にあり、現在の生活に適応しきれないでいるものと思われる。このような親達を、いかに援助し、励まして、子どもの発達の状態に目を向けさせていくかが、学校の教師をはじめとする専門家の重要な課題となろう。さらに、これらの親が、精神薄弱児をもつ親に多いことも明記しておかなければならない。

表9 “障害児であるために「あきらめ」の気持ちをもったことがありますか”

	精 薄	肢 体	盲	ろ う
は い	32.0	18.0	11.9	12.5%
いいえ	60.4	68.0	73.8	64.7%

表10 “この子が「もしなければ」と思ったことがありますか”

	精 薄	肢 体	盲	ろ う
つねにそう思っている	1.2	0	0	1.5%
時々そう思っている	38.2	22.2	7.1	21.8%
そう思ったことはない	56.7	72.2	80.9	62.5%

表11 “この子どもがいることで自分や家族にとって「生活のはり」を感じさせますか”

	精 薄	肢 体	盲	ろ う
は い	62.9	59.7	64.2	51.5%
いいえ	24.6	16.6	16.6	20.3%

3) 子どもに対する親の態度

表12は、子どもの養育についての項目の結果である。各障害ともに“どのように育ててよいかわからなかった”という回答が最も多く、子どもの養育についてとまどいを示していることがわかる。特に、精神薄弱児や肢体不自由児の親において、養育の不安が大きいのが特徴的である。このように、養育についての不安を感じている親が多いにもかかわらず、子どものしつけや教育に関する項目では、普通に対処したと答えており(表13)、障害児の親に特有な過保護の傾向は少なく、実際には意外とうまく子どもと接しているようである。

表12 “子どもの養育で心配だったことについて”

	精 薄	肢 体	盲	ろ う
どう育ててよいかからがない	62.9	58.3	45.2	48.4%
しっかり育てられた	6.1	5.5	9.5	4.6%
ふつうに育てた	25.9	27.7	30.9	42.1%

表13 “子どもへの対処のしかた”

	精 薄	肢 体	盲	ろ う
かわいがりすぎた	28.3	38.8	23.8	20.3%
きびしすぎた	9.8	2.7	4.7	10.9%
ふつう	58.0	55.5	64.2	65.6%

表14は、子どもの世話にどの程度の時間を使うかということについて質問した結果を示している。全障害にわたって“あまり世話をやかせないから、時間はとらない”という回答が多かった。この項目は、現在の状態について尋ねているため、このような回答が多かったものと思われる。つまり、現在、子どもは学齢期に達しており、子どもへの対処の仕方に親がある程度慣れてきているためであろう。

表14 “現在、お子さんの世話にどの程度の時間を使いますか”

	精 薄	肢 体	盲	ろ う
ほとんど毎日かかりっきり	19.7	9.7	4.7	25.0%
あまり世話をやかせないから時間はとらない	59.2	75.0	71.4	59.3%
子どもの世話をする余裕がないので放っておく	6.1	4.1	7.1	7.8%

表15は、障害児“親の会”への入会の有無について尋ねた結果である。全障害にわたって約6～7割の親が人会していない。これは、障害児をもつ親同志の横の連携が薄いことや“親の会”の存在についての認識不足、さらには、障害児の親に特有な意識による対外的接触に対する消極的態度といった様々な要因が考えられる。そこで、現在、“親の会”に入会していない親について、入会の意志を問うてみると、各障害でわずかな違いはあるものの、概して、入会に対する強い希望は見出し得なかった(表16)。このことは、“親の会”に対する認識不足や、親間の連携のなさといったこと以上に、親の対外的接触に対する消極的態度を反映しているものと捉えることができる。親の会の意義について

は様々なことが考えられるが、同じような子どもをもつ人たちと悩みや苦しみを語りあったり、慰めあったりすることで気持ちが楽になるといった、親のフラストレーションに対するカタルシス効果が最も大きいものとする。親の心理的安定のために“親の会”のはたす役割は大きいものがあるが、親の対外的な消極的態度がその関与を阻んでいるようである。親の意識を“親の会”のような対外的活動に対する積極的な関与へと向けていく手立てや指導の仕方が重要な課題になる。

表17は、子どもの将来について親がどのように考えているかについて質問した結果である。

表15 “あなたは障害児の親の会に現在入会していますか”

	精 薄	肢 体	盲	ろ う
は い	28.3	20.8	11.9	17.1%
いいえ	62.9	69.4	69.0	71.8%

表16 “今後入会したいですか”

	精 薄	肢 体	盲	ろ う
は い	49.0	30.0	58.6	39.1%
いいえ	23.5	30.0	10.3	41.3%

表17 “お子さんの将来について”

	精薄	肢体	盲	ろう
●身のまわりのことが自分でできるようになればよい	55.5	37.4	28.5	26.5%
●ひとつおとり、読み書き算数ができるようにさせたい	29.6	26.3	2.3	17.1%
●まがりなりにも義務教育を終らせたい	12.3	9.7	2.3	6.2%
●手に職をつけさせたい	60.4	30.5	42.8	51.5%
●特別な施設で生涯保護をしてもらいたい	13.5	13.8	7.1	1.5%
●高校まで進ませたい	19.7	26.3	28.5	34.3%

精神薄弱児や肢体不自由児の親は、身辺自立や就職のための技術習得を希望し、視覚障害児や聴覚障害児の親は、就職や進学の問題を主に考えているようである。また、“子どもの教育のための知識をどこから求めていますか”という項目については、断然、“学校の教師から”という回答が多かった(表18)。現在、子ども達が学校教育を受けていることからすると、当然の結果であろう。教師は、子どもの発達状況や親の悩み、葛藤などの意識の状態を適確に把握したうえで、適切な援助や助言をしなければならない。そのためには、教師の専門性の向上と一層の努力が要請される。

表18 “お子さんの教育のための知識を、どこから求めていますか”

	精 薄	肢 体	盲	ろ う
マスコミ	22.4	29.1	20.8	12.4%
学校の教師	65.4	59.7	52.3	78.1%
医 師	22.2	13.8	7.1	7.8%
講演会	24.6	11.1	4.7	12.5%
P T A	20.9	11.1	4.7	9.3%
友だち	20.9	12.5	0.0	9.3%

神園：障害児をもつ親の意識の変容過程

2. 調査項目間の相関行列による検討

調査項目のクロス分析を行うために、四分相関係数によって項目間の相関を各障害別に算出した。なお、分析にあたっては、回答が極端に片寄っている項目や、自由記述の回答を求める項目、そして二者択一以外の回答様式の項目は除いた。ただし、三者択一の回答様式の項目で、

その回答を2種類に分類できる項目については分析の対象とした。実際に分析の対象とした調査項目を表19に示した。それぞれの結果は相関行列にして表20～表23に示した。表中の*印は、無相関検定によって1%水準で有意であることを示す。

表19 相関の対称項目

- 1 障害児をもったことに対して、はずかしいと思いましたか。
- 2 障害児であると診断されたことについて
- 3 障害児を出生したことに対して
- 4 正常な子をもつ親に、「うらやましき」を感じましたか。
- 5 子どもへの対処のしかた
- 6 子どもの養育で心配だったことについて
- 7 現在、お子さんの世話を、どの程度の時間を使いますか。
- 8 障害児であるために「あきらめ」の気持ちをもったことがありますか。

(表中の数字は項目番号で、表20～表23の相関行列における行列番号に対応する)

表20 相関行列 (精神薄弱)

	1	2	3	4	5	6	7	8
1								
2	.31							
3	.49	.33						
4	<u>.73*</u>	.34	.14					
5	<u>.71*</u>	<u>.68*</u>	.50	.71*				
6	.39	<u>.68*</u>	.18	<u>.66*</u>	<u>.70*</u>			
7	<u>.77*</u>	<u>.75*</u>	.46	.58	<u>.72*</u>	.84*		
8	<u>.67*</u>	.45	.48	.55	<u>.77*</u>	.41	.73*	

表21 相関行列 (肢体不自由)

	1	2	3	4	5	6	7	8
1								
2	-.99*							
3	.72*	.26						
4	<u>.69*</u>	.30	.58					
5	<u>.57*</u>	.75*	.50	.67*				
6	.53*	.36	.40	<u>.61*</u>	<u>.65*</u>			
7	<u>.78*</u>	<u>.86*</u>	.78*	.58	<u>.80*</u>	.89*		
8	<u>.80*</u>	.36	.70*	.69*	<u>.62*</u>	.28	.74	

表22 相関行列 (視覚障害)

	1	2	3	4	5	6	7	8
1								
2	.42							
3	.78	.17						
4	<u>.88*</u>	.55	.46					
5	.83	.65	.82	-				
6	.64	.64	.53	<u>-.99*</u>	.82			
7	<u>.88*</u>	<u>.94*</u>	.76	.86	.88	.77		
8	<u>.87*</u>	.31	.88*	.73	.83	.45	.78	

表23 相関行列 (聴覚障害)

	1	2	3	4	5	6	7	8
1								
2	.44							
3	.58	.00						
4	<u>.78*</u>	.52	.74					
5	<u>.70*</u>	.63	.39	-				
6	.60*	.64*	.51	<u>-.99</u>	<u>.91*</u>			
7	<u>.76*</u>	<u>.74*</u>	.37	.75*	<u>.76*</u>	.83		
8	<u>.83*</u>	.54	.81	.72*	<u>.85*</u>	.47	.86*	

各障害に共通して項目間の相関が有意に高いものについて、表中の相関係数に下線（実線）を引いて示した。視覚障害児の親は、他の3群の親に較べて項目間の有意な相関が少ない。これは、データの数が少ないこともその原因として考えられるが、先の回答の割合による分析においても、他の3群とは幾分異なった傾向を

示していたことを考え合わせると、他の親の群とは違った特異な意識傾向を持つのかも知れない。ともあれ、視覚障害児の親を除いた他の3群に共通して有意な相関を示すものについても、その相関係数に下線（点線）を引いて示した。さらに、これらの項目間の全体的な関係を図2に示した。

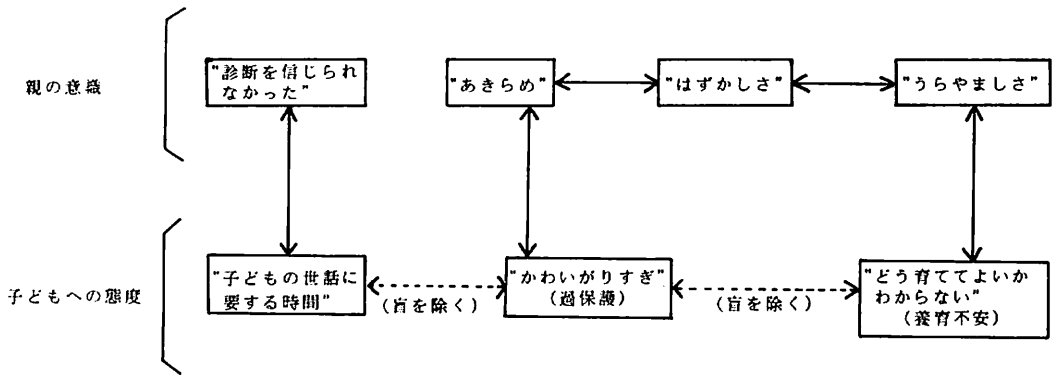


図2 項目間の関係

ここで、相関の意味について記しておかなければならない。項目間の相関が高いことは、一方の項目で“はい”と答えた親は、他方の項目でも“はい”と答える傾向があり、逆に一方の項目で“いいえ”と答えた親は、他方の項目でも“いいえ”と答える傾向が高いということを意味している。

障害児をもつたための“はずかしさ”という感情と、健常児の親に対する“うらやましさ”という感情とは拮抗関係にあるのではないかと先に述べたが、予想通り、両項目間の相関は高かった。つまり、“はずかしさ”を経験する親の多くが“うらやましさ”を感じていることがわかる。また、“はずかしさ”の項目は、“あきらめ”の項目とも相関が高かった。“はずかしさ”の感情は、“うらやましさ”といった嫉妬心や、“あきらめ”という拒否的感情へと変容し、子どもに対する態度がそれぞれ“どう育ててよいかわからない”という養育不安や、“かわいがりすぎ”といった過保護の傾向となって顕現化してくるものと思われる。このように、親の意識や感情が子どもへの態度と密接な関係にあることが一層明らかになった。本調査の時点におい

ては、子ども達は学校教育を受ける年齢まで達しており、親の多くが“生活のほり”を感じていると答えているところから、上記のような幾多の苦難を乗り越えて生活に適応しているものと推察される。問題は、子どもが障害児であると判明した後、就学年齢に達するまでの親の援助や指導をいかに保証していくかであろう。現在、障害児保育事業や教育相談事業が活発になり、障害幼児への対策が推進されつつあるが、子どもの指導もさることながら、親への指導や援助も重要な問題であることを指摘しておきたい。そのための行政施策の充実と、専門的資質に豊かな人的資源の確保が大きな課題となろう。

文 献

- 鏈幹八郎 1963 精神薄弱児の親の子ども受容に関する分析的研究, 京都大学教育学部紀要第9号, 145~172
- 伊藤隆二編訳 1980 精神遅滞児の心理学, 日本文化科学社(Robinson N.M. & Robinson, H.B. 1976 The Mentally Retarded child, McGraw-Hill, Inc.)

神園：障害児をもつ親の意識の変容過程

- 岩原信九郎 1973 教育と心理のための推計学，日本文化科学社
- Korkes, L. 1955 A study of the impact of mentally ill children upon their families, New Jersey Department of Institutions and Agencies.
- 宮本茂雄 1960 精薄児の病理・心理・社会学，精神薄弱児講座 I，日本文化科学社
- 宮本茂雄編 1980 精神薄弱児の心理，学芸図書株式会社
- 水田善次郎 1978 ダウン症候群の心理的研究 長崎大学教育学部教育科学研究報告第25号
- Rosen, L. 1955 Selected aspects in the development of the mother's understanding of her mentally retarded child, American Journal of Mental Deficiency, 59, 522.
- 高良茂子，照屋悦子，宮良葉子 1983 ダウン症児を持つ親の意識調査——一般精薄児を持つ親との比較を通して——，琉球大学教育学部特別専攻科修了論文

資 料

障害児を持つ父母への意識調査

〈目的〉

この調査は、障害児を持つ御父兄が子どものしつけや教育について、どのように考えていらっしゃるか、さらには、障害児を持つが故の御父兄自身の悩みや、葛藤などについて、お聞かせいただくものです。お答えしづらい項目もあろうかと思いますが、今後の障害児教育のあり方を考えるための貴重な御意見とさせていただきますので御自由に御回答をお願い申し上げます。

ご協力の程、折に、御要望致します。

該当するものに○をつけ、()に数字をお書きください。

回 答 者 ア 父 イ 母	同居している家族		
回答者の年齢 () 歳	1 父	5 兄 () 人	9 その他 () 人
お子さんの性別 ア 男 イ 女	2 母	6 姉 () 人	10 合 計 () 人
お子さんの年齢 () 歳 () カ月	3 祖父	7 弟 () 人	
	4 祖母	8 妹 () 人	

神園：障害児をもつ親の意識の変容過程

お子さんが出産してから、今日に至るまで、いろいろな心の動きを経験されたと思いますが、どのようなことがありましたか。該当する項目に○をつけて（ ）にお答えください。

問1. 障害児であるとはっきり言われたとき、大きなショックを受けましたか。

ア 受けた イ 受けなかった

〈アに○をつけた方は、次にお答えください〉

(1) それは、お子さんが出生してから、どの位たってからですか。

()

(2) ショックを受けたのは、どうしてですか。該当するものに○をつけてください。

- ㉒ 生まれながらに障害児であったから。
- ㉓ 自分のまわりに障害児がいなかったから。
- ㉔ 初めての子だったから。
- ㉕ 障害児についてあまり知らなかったから。
- ㉖ その他、どんな小さな事でも気づいたことがありましたら、書いてください。

()

(2) はじめて障害児だと知らされたのは、だれからですか。1つ○をつけてください。

- a. 医師 b. 夫（または妻） c. 祖父母
- d. その他 ()

問2. 障害児をもつなことに對して、はずかしいと思いましたか。

ア 思った イ 思わなかった

〈アに○をつけた方は、次にお答えください〉

(1) それは、お子さんが出産してから、どの位たってからですか。

()

(2) はずかしいと思ったのはどうしてですか。がい当するものに○をつけてください。

- a. 同年の子と比べて、知恵がおとっているから。
- b. 顔かたちが、他の子と、かわっているから。
- c. 動作がにぶいから
- d. 人にいろいろと聞かれるから
- e. その他、ありましたら、書いてください。

()

〈イに○をつけた方は、次のことにお答えください。〉

- (1) それはどうしてですか。がい当するものに○をつけてください。
- a. 障害児だということを意識しなかったから
 - b. からだが、健康だから
 - c. しいによくなっていくと思ったから
 - d. その他、ありましたら、お書きください

()

問3. 障害児であると診断されたことについて

ア 信じられなかった イ 信じた

〈アに○をつけた方は、次にお答えください〉

- (1) それは、出生後どのくらいですか。

()

- (2) どうして信じられなかったのですか。1つ○をつけてください。
- a. 夫婦とも健康だったから、障害児が生まれるわけではないと思った。
 - b. 妊娠中に異常はなかった。
 - c. 医者の誤診であればよいと思った。
 - d. 身内に障害児はいない。
 - e. その他、ありましたら、お書きください。

()

問4. 障害児を出生したことに対して

ア 自分に責任があったと思った イ 他に責任があったと思った。

〈アに○をつけた方は、次にお答えください。〉

- (1) それは、出生後、どの位たってからですか。

()

- (2) どういうことでそう思いましたか。()にお書きください。

()

<イに○をつけた方は、次にお答えください。>

- (1) どういうことで、そう思いましたか。()にお書きください。

()

問5. 正常な子をもつ親に、「うらやましき」を感じましたか。

- ア はい イ いいえ

<アに○をつけた方、次にお答えください。>

- (1) それは、出生後どの位たってからですか。

()

- (2) 「うらやましき」を感じたのは、どうしてですか。お書きください。

()

問6. 子どもに対しては

- ア かわいがりすぎた イ きびしすぎた ウ ふつう

<アに○をつけた方は、次にお答えください。>

- (1) それは、だいたいお子さんが何歳ぐらいのときですか。

()

- (2) それはなぜですか。あてはまるものに○をつけてください。

- a. かわいそうだから
b. ことばが通じないから
c. からだが弱いから
d. その他、ありましたら、お書きください。

()

<イに○をつけた方は、次にお答えください。>

- (1) そのわけは、なぜですか、あてはまるものに○をつけてください。

- a. からだが弱いから
b. はやく自立させたかったから
c. わがままになるから
d. その他、ありましたら、お書きください。

()

問7. 子どもの養育で心配だったことについて

ア どう育ててよいかわからない イ しっかりと育てられた ウ ふつう
<アに○をつけた方、次にお答えください。>

(1) どういう面で不安でしたか、あてはまるものに○をつけてください。

- a. からだが弱く、じょうぶに育つか、不安だった。
- b. お乳のすいつきが悪かった。
- c. 立ったりすわったりできなかった。
- d. 排便、排尿の自立ができなかった。
- e. 言葉が話せなかった。
- f. 文字を書いたり、読んだりできるか不安だった。
- g. その他、ありましたら、お書きください。

()

問8. 現在、お子さんの世話に、どの程度の時間を使いますか。1つ○をつけて下さい。

- ア ほとんど終日かかりっきり
- イ あまり世話をやかせないから、時間はとらない。
- ウ 子どもの世話をする余裕がないので放っておく。

問9. 障害児であるために「あきらめ」の気持をもったことがありますか。

- ア はい イ いいえ

<アに○をつけた方は、次にお答えください。>

(1) なぜ「あきらめ」の気持をもちましたか、お書きください。

()

(2) それは、お子さんの出生後、どの位たってからですか。

()

(3) その後、子どもに対する接し方(気持)はどのように変わりましたか。あてはまるものに○をつけてください。

- a. あまりかまわなくなかった。
- b. どこにもいっしょに連れていった。

- c. 今まで以上に、子どものことを考えるようになった。
- d. ふつうの子と同じように育てた。
- e. その他、ありましたらお書きください。

()

問10. この子が「もしなければ」と思ったことがありますか。

ア つねにそう思っている イ 時々そう思う ウ そう思ったことはない

<アに○をつけた方は、次のことにお答えください。>

(1) それは出生後、どの位たってからですか。

()

(2) それはどうしてですか。あてはまるものに○をつけてください。

- a. ほかのきょうだいのためによくない。
- b. お金がかかる。
- c. もっと自分のことができる。
- d. 家族の不和のもとになっている。
- e. 自分が一生みじめな気持ちでいなければならない。
- f. その他ありましたらお書きください。

()

問10. この子どもがいることで、自分や家族にとって「生活のはり」を感じさせますか。

ア はい イ いいえ

<アに○をつけた方は、次のことにお答えください。>

(1) それは出生後、どの位たってからですか。

()

(2) この子がいることにより、あなたはどう変ってきたと思いますか。あてはまるものに○をつけてください。

- a. 社会や気の毒な人々のために尽くしたいと思うようになった。
- b. 純心、すなおな気持ちを学ぶことができる。
- c. この子のために、家族の結びつきが強くなった。
- d. 他のきょうだいの教育に、一層力をそそぐようになった。
- e. その他ありましたら、お書きください。

()

(3) どのようなきっかけで「生活のはり」を感じるようになりましたか。

- a. 友だちやまわりの人たちに励まされたから。
- b. 障害児をもつ親の集いに参加したり、同じ悩みをもつ人々と話すようになったから。
- c. 子どもが成長するにつれ、かわいくなったから。
- d. 信仰心をもつことによって。
- e. その他ありましたら、お書きください。

()

問12. あなたは障害児の親の会（手をつなぐ親の会）に、現在入会していますか。

ア はい イ いいえ

<アに○をつけた方は、次にお答えください。>

(1) 今後も継続して入会したいですか。

a. はい

[a.に○をつけた方へ]

(1) いったきっかけは何ですか。

()

b. いいえ

[b.に○をつけた方へ]

(1) それはなぜですか。

()

<イに○をつけた方は、次にお答えください。>

(1) 今後、入会したいですか。

㊦ はい ㊧ いいえ

問13. 子どもの教育について

1. お子さんの教育に主に気をくばっておられるのはどなたですか。1つに○をつけてください。

ア 両親で話し合う イ 主に父 ウ 主に母 エ 主に祖父母 オ 主にきょうだい

2. お子さんの教育で家の人のほかに、どなたか相談する人がいますか。

ア はい イ いいえ

<アに○をつけた方は、次のことにお答えください。>

(1) それはどうかたですか。

